

波の音がする。潮の香り、好きか嫌いかで判断するには当たり前すぎた、令人は時計をみて時間を確認する。

「何時？」

淑音がきいて来る。時計をみせた、画面には数字が浮ぶ、厳格い、兄が中学の頃流行していたものだという。お下りだが令人は其時計を気に入っていた。

淑音は海を見ている。クラスメイトよりは少し長い髪が風に撫靡く、さわりたいと思った。

「染めるなよ」

気もちを隠して淑音にいう、淑音は問う様に頸を傾げた、

「二組の女子で、髪染めんの流行ってんじゃない。まあ似合う子はいいんだけどさ、似合わない子の方が多いって、絶対」

「私には似合わないって？」淑音は髪をつまんでかすかに笑う。

「まあ、正直に言えば左ういうことだよ」

「そこは嘘でも似合うっていえよ」

淑音が笑って軽く殴る。拳の当たった右肩が、熱くなった様に感じられた。電車がきたのでのり込む。朝なので、人は多い。

「私も少しぐらい染めたいんだけどね、お父さんがだめだって。高校生になってからだっていうんだけど、違いがわかんないよね。中学生と高校生って、其んなちがうのかな。人士さんは、なにか言ってた？」

兄の名前をだされてはっとする、「兄貴は、どうだったかな、別に変ねえっていった気がするけど、ああでもバイト始めて金持ちになってたかな、時々奢ってくれたし」

五つ上の兄のことを思い出す。いまは大学生で一人暮らしをしているので、時々しか帰って来ない。淑音がくすくすと笑った、「なに？」

「兄貴って、きくの、まだ馴れない。ちよっと前はお兄ちゃんお兄ちゃんって後喰っついて歩いてたのにね」

恥しくなった、「ちよっと前って、もう三年位前だろ、小学生の時だ。って、そうだよな、いま中三だから、もう三年前になんのか、うへえ時間が経つのは早いなあ」

「なにいつてんのよ、それに中学生になった瞬間から兄貴っていい出した訳でもないでしょ、ね、いつ頃からいい出したんだっけ、なんか切懸けでもあったの」

話を外らしたかった「うるせえなあ、ねえよきっかけなんて。単にお兄ちゃんって呼ぶのが恥しくなったんだよ、そんなことより、おじさん、そんな厳しかったっけ、昔からそんなにごちやごちやいわない人だったけど」

「うーん」淑音は考えた、「中学生になってから急にね。いままで厳しくて、ってことなら分るんだけど、急にだからむかつくんだよね、まあだからって喧嘩してまでそめ様とも思わないけどさ」

「やっぱり」言った所で駅に着いたのに気が付いた。津倉駅。学校があるのはまだ先の駅だが淑音の顔色が変わる。

「先生」指先で令人に別れを告げると、のり込んできた細身の男の所へ寄って行く。令人は暗い気もちになった。淑音の「お早うございます」が聞えて、鞆からイヤホンを取り出すと音楽を流した。

夢中できいた。

海沿いを走る電車は、古くて、この地域の名物になっている。旧態で、短かい、なにがいいのか分らない、遠くから乗りにくる人もあるといふ。風物としては古刹や海なども有名だから、電車だけが目的といふのでもないだろうが、彼等のいう情緒がわからない。学校の奴らは二つに別れる、いいじゃん、この町の誇りだよ、と肯定す

る奴か、古臭くて、名物のせいで、やたらに混む、迷惑だと疎む奴か、淑音は、いつていたな、いいんじゃない。あたしは好きだよ、でも、高校も卒業したら、出て行きたいとも思ってるけど。令人は高校を出てからの自分を想像できなかった。

中学では、部活動でバスケットボールをしている。練習の終わりがろ、ひよつと淑音がやって来る。

「もうおわる？」

「ああ、もうすぐ」

「じゃあ迎えに来てね」

どこへか姿を暗ました。部員の連中がいなくなったのを見届けて騒ぎ出す。

「てめえ嬉戯ついてんじやねえよ」

「いいなあ淑音ちゃん、俺も一所に帰りてえよお」

「其んなんじやねえよ」令人は嫌な顔をしてつぶやいた。夫は嫌な顔になったのか、つくったのか、わからない。後輩まで付突き出した。

「やっぱ先輩凄いつすわ」

「ねえ、ねえ、どこ迄いったんすか」

「うるせえ！ お前ら片付けどうした」こちらは怒鳴ると蜘蛛の子を散らす様ににげていった。

部活の後は疲れて疲憊になるが、時々淑音と帰る日があつて、左右いう時は心もちがかわる。心が浮き立つ、誘われた其一瞬だけは。重いバッグを肩に掛けて理科室へ向った。日は暮れていて、雨の音だけが、はつきりと存在する。理科室の電気はついていなかった。窓の近くには外灯があつて、其光りが、淑音をかすかに浮び上らせる。淑音は教壇にいた。椅子に座つて、机に顔を臥せて、幸せそうに目を眠っている。

「ほら、帰るぞ」

声をかけるが目は披かない。「あと少し」怠惰に答えて少し笑う。令人はとなりに椅子をもつて来た。座ると淑音が目丈披いた。「ね

え、夜の理科室って、神秘的じゃない。ぼうっと光って、これから、いまにも動き出しそう」顔を傾むけて令人を見上げる。

「これが月明りだったらな」

令人はそっ気なく答えて、「それにおれは怖えよ」室を見回して加えた。

「風流がないなあ」

淑音が独語く、立ち上った、伸びをして、帰り支度をする。

「匂いでも嗅いでたのか」

動揺が声に出ないように、抑える。教壇をみたが、名残はなにもなく、きれいな丈だった。

「ちがうよ、只、考えてただけ。この場所に立って、授業したり、私の言葉に答えてくれたり、……」

遠い目をする淑音を見た。令人は椅子をしまう。「鍵はもってるんだろ」訊くとチャラチャラと音を鳴らす。

「化学部の部長ですから」

扉をしめて、鍵をかける音が響いた。中学の一年の時、一年間だけ淑音は引越しをしていた。おじさんの仕事の都合で、最初は何年後に戻ってこれるかわからなかったという。物心ついた時から一緒にいた幼馴染との別れを、令人は悲しんだ。夫でも表立って悲しむことは憚られて、振っ切ら棒に「ほら」といって餞別を手渡した。夫は小さい陶器でできたイルカのキーホルダーだった。「ありがとう」淑音は泣いてお礼をいった。令人はなにもいわず走り去った。走って走って山へ登って、どれが淑音ののった車か、どの方角へ行ったか、丸で分らなくなったことに気づきながら茫然りと遠くをみっていた。

一年後に戻って来た時も淑音は其キーホルダーを持っていて、「宝物」といって笑ってくれた。令人は嬉しかった。だから其キーホルダーと、もう一つ増えた宝物、理科室の鍵が喰っついて一つになった時、なにもいえなかった。

宝物同士だね。

淑音は左う言ってキーホルダーを抱き締めた。令人は淑音の
を見ていた。やがて目を逸らすと、遠くの海をみて、波の寄せる音
をかすかにきいた。

淑音はベッドに仰向けになった。幸福感が押し寄せ、次いで恥
かしい気もちが湧く。叫び出したい位恥ずかしくて、何でこんな
気もちになるんだろうと思う。

「先生、映画行きましょう」

予め、きょう言おうと決意して臨んだが、用意した言葉は凡て
むだになった。口が顎々して、先生が構えない様に無邪気な感じを
出そうとしたが、装えたという自信はない。

「映画？」

「そう、あたし、いま見たい映画があつて、夫が凄いい泣ける映画
らしいんですよ。外国の、朝は目を抱くつていうの、知ってますか？
なんか奇病を治療しようとするお医者さんの話で、実話がもとな
なってるって聞きました。私の友達、恋愛映画が好きな子ばかりで、
いっしょに行ってくれる子がいないんですよ。私の趣味って年相
応じゃないんですかねえ。一人で行くのはちよつと淋しいんで、先生
つき合ってもらえませんか」

背のびをしたかった。其映画を本当にみたいと思つたのかも、わ
からない。ただ、こどもだと、思つて欲しくなかつた。だからい
えば伝ると思つた。本当は、いつても、つたわらない。寧ろ安易に
言葉にすれば、相手が疑がいを抱くことさえある。自分がどんな人
間かは、相手がきめることだ。平生の行動から、言葉から、相手が
時間をかけて感じて行くものだ。でも淑音は（令人も）、説明さ
えすれば通じるものと思つていた、この時点では。

「ああ、みたよ」西浜はいった。「夫の原作つて結構有名な小説
でね、本屋で働らいてる友達が試写会に誘つてくれたんだ。なか
か面白かつたなあ、ぜひみて御出。全然難かしい内容じゃないから、
友達と行つても楽しめると思うよ、みたら感想きかせてね」

めがねを拭きながら答えた。淑音は動悸を感じた。先生が興味を持ちそうだと独断できめた映画が何本かあって、最初にこれで誘おうと思ひ定めたのが別にあつた。しかし夫はもう公開して二日経っていたので、まさかもう見たということはないだろうが、万全を期してまだ始まつていないこちらの映画にしたのだった。夫が裏目に出るとは、試写会なんてありか？ 思つたがとり敢ずしゃべつた。「じゃ、じゃあ吐息をひそめておやすみをつて映画はどうですか、こつちはまだ始つたばかりで、あんまり話題の映画つて感じじやあないんですけど」

「ああ、見たよ、其池は其んなに好みじゃなかつたかな」まだめがねを拭いて居る。「でも、気に入つたシーンもあつたな、主人公が、目の前でねている好きな子にね、なにか言おうと口を抜くんだけど、迷つて、言うのを廢めるんだ。そとでは雨が降つてて、画面は、窓をうつす。雨の音は少し強くなる。僕はそこで、主人公がやつぱりなにか言つたんじゃないかと思ふんだけど、言わなかつたかもしれない。想像の余地があつたんだね。もし見ることがあつて、もし覚えてたら、其所の解釈も教えてよ」蛍光灯に透して汚れの有無を確かめる。

淑音は完全に焦つていた。「先生、映画好きなんですな」最初の候補もだめとは。「私が見たいと思つてたの見てるなんて、さすがです。其映画は後日みれたら絶対報告しますんで、もし次何かみに行くのあつたら、誘つて下さいよ。私結構どんな映画でも好きになれちゃうんで、これからの勉強のためにも、あ勉強つていっても人生の勉強つていうんですかね、のためにもぜひ伴れて行つて下さい」焦つた儘しゃべる。

「次、か」西浜は傾むけながら確認していためがねを掛けた、「そうだね、じゃあ稲村さんが卒業して三年ぐらい経つたら誘わせて頂こうかな」少し笑つて淑音をみる。

「三年つて」出て来た年月にぐらりとする。「私、十八ですよ。やらしいなあ映画行くだけじゃないですか、なんか意識してるんで

すかあ私身の危険感じちゃうなあ」怯える佯で身を竦ませる。

今度は明然笑った、「ぼくに取って、女の子と出懸けるっていうのは左右いうことなんだよ。だから、三年後に、きつと行こうね」まっすぐに淑音を見る。

淑音は痺れた様になった。其目が優しく、笑顔が優しく、届かない事を感じた。自分が理科室にいることを思い出した。外の化学部員はみんな帰っている。外部からは、運動部の懸声が聞える。もう少し丈先生と話して、先生は仕事があるというので職員室へ戻った。

淑音は其儘茫としていた。気が付くと、バスケ部が終る時間だったので、令人に声を懸けに行った。戻って来てまた茫とした。先生のことを思い返した。細くて、背が高く、笑顔の似あう男の人、：淑音の胸には幸福感が満ちた。

しかし帰ってみると、まさか断わられるとはなあ、と言う思いが萌した。断わられる可能性を考慮しなかった訳はないが、先生の性格上、いいよと了承するだけで今度ねいつかねと先延ばしにし続けるのではと思っていた。だから其所からいかに約束を楯にして履行を迫るかを重に策謀していた。夫が、其所にさえ、到達できないとは。淑音は自分の楽観や、焦って仕舞ったことを恥しがったり、おち込んだり、先生のことを思い返したりした。

淑音はご飯よと母親に起されるまで、いつか眠っていた。左手には宝物の鍵が握り締られていて、鍵のギザギザが手に痕をつけて少し、痛んだ。

「大町、お前、稲村さんと別につき合っていないってほんと」

体育の授業はハンドボールだった。令人の部活動であるバスケットボールと、ハンドボールはルールが似ていることもあり、令人は活躍した。そも、令人は大抵のスポーツで活躍できる。部活動でも、一番二番を争う伎倆だと、自信していた。しかしそんなことに何の意味があるだろう。中二の途中まで単純に感じ、酔うことの出来た

達成感や自尊心を、信じ悪くなっている自分に気が付いた。

「ああ、そうだよ」令人は答える。「みりやわかるだろ」

汗を霑いたので、顔を洗っていた。置いてあったタオルを、質問した坪内が取ってくれる。

「見たら誤解するだろ、毎日一所に登下校してんだから」

「毎日じゃねえよ。家が近いから、時間が合えば時々帰る位のことだよ」

行きのことにはふれなかった、淑音から一所に行こうと頼まれて
いることには、「それにしたって、始終一所にいるだろ。でも、
まあ、つき合ってはななんだな」

「ああ」顔を拭うと晴れた空が目に着いた。背中に汗が滲むのが
感じられる。梅雨だから、はれると、嬉しい、とくに体育の日は。
しかし余りにも暑くて嫌になることもある。

「じゃあさ、一寸、協力してくれよ。つき合っていないんだったら、
問題ないだろ」

「協力？ 協力って、なにを」

「稲村さんのことだよ、俺とお前と、稲村さんに友達一人呼んで
もらってさ、デートしようぜ。二人だったら警戒されるかもしれな
いけど、四人だったら平気だろ。どう？」

「あれ、お前と淑音って、同じクラスだっけ」

「そうだよ、二組、だから体育一所にやってんだろ。でもああ淑音、
淑音、淑音ちゃんかあ、いいねえ其呼び名」

「まあ、小学生の時は、座布団っていわれてからかわれてたけど
な」しとねという語には、座布団という意味がある。小学生の時、或
男子生徒が其ことを調べ上げて来て公表した。淑音に気があった男
子連は、此些細な接点を嬉しがって積極的に採用した。淑音は最初、
例えば令人に為替相場というあだ名を付けて抵抗する杯したが、こ
ちらは今いち要領を得ず呼びにくかった為成功したとは言い難かつ
た。其内淑音は泣いた。先生は怒り罪悪感が胸に迫り少年達は罪科
を押し合った。結果令人が重に責任を負った。令人は黙しだれの

せいにもせず潔せいよい態度を装ったが、夫それは単に令人れいとが調べた本人であり一番口に出して泣かせたからだった。

「座布団？ 何で其その様なあだ名がついたんだよ」

「しとねって、座布団を意味することばなんだってさ、あと布団とか、敷物とかか。おじさんお婆さんがしってて名前つけたのかわかんないけど」

「ふーん、ひでえ奴だな、そんなあだ名をつけた奴は、ああもし俺が居たら片かたっ端ばしからぶん投げてやんのになあそんな奴等やつらは、淑音しとねちゃんのヒーローになりたい」夢みる様に手を合わせた。「で、どうなんだよ、手伝ってくれるのかくれないのか」

合わせた手の儘まま此方こちらを見る坪内を、見返した。坪内は、かっこいいというより、可愛かわいらしい顔をしている。夫それでいて柔道をやっている、結構強いらしく、其そのギヤップが不堪たまらないという評価を、女子から聞いたことがある。令人れいとは想定した。少し上に目を遣やると、黒く厚い雲が奥から膝行にじって来ているのに気が付いた。

雨の音がする。風が強くて、窓を能く叩く。ここ数日、仲々なかなか雨の霽やみ間がない。令人れいとが自分の室へやで窓を見ていると、淑音しとねが手を差し出した。

「はい、ラブレター」

受け取って、確認するが、名前はない。「だれから？」訊くと「二組の奈緒子なおこちゃん」と答える。

「どんな子」

「かわいいよ。ちょっと大人おとなしいけど、優しくて、令人れいとには合あうんじゃないかな」

「ふーん」どうでもよく聞える様に独語つぶやく。「知らないな」

「なにしてんの」

怒った声に驚おどろいて淑音しとねを見ると、自分の手を見ていた。手紙を破り掛かけていたことに気付く。

「お、あ、ちゃんと、机にしまつてと」

「読みなさいよ」淑音がジロリと令人を見る。「夫から返事もね」ベッドに座って威儀を示す。

夜、淑音は令人の室に来て居た。淑音の家は令人の家から二件隣りに有り、時々遊びに来る。令人は淑音の家へ行かない。こどもの時の様に、気安くはいけなくなった。だから同じ様な気安さを保っている淑音を、疎ましく思う気もちもある。

「だって話したこともないのになあ、どこが気に入ったんだろ」
「バスケしてる姿がよかったんだってよ、まあ書いてあると思うけど。いいじゃない、別に好きな人いないんでしょ」

夫には答えなかった。「まあ、断わつていてよ」

淑音はため息を吐いたが夫れ以上の追及はしなかった。女の子から手紙を貰ったのは、始めてではない。告白された事も、何度かある。然し心が動いたことはなかった。

「どうせ欲しいものは……」知らず口に出していた。

「なに、欲しいものって」

「ん、ああ」少し狼狽する。「名誉とか？」口から出るのに任せる。

「なにそれ、名誉なんて、別にいいじゃん。もっと大切なものあるでしょ」

「そうかな、夫って、ミュージシャンとかが名誉なんて要らないとか、能くゆうからそんな気になってる丈なんじゃない。俺は、ほめられたいとか、思うよ、認められたいとか」

「令人って」淑音は首を傾げた。「時々変な事いうよね。余まり、夫って、いい気もちじゃあないと私は思うけど」

言われると左うかも知れないなと思った。自分の意見を主張したい訳ではないので、令人は黙った。淑音もそれ以上言わなかった。テレビの音が、雨の音を攪き交ぜる。其光を二人は暫らく見た。不意に淑音が声を騰げた。

「あ、そうだ、映画行こうよ、みたいのがあるの」

「映画？」或記憶が頭を刺戟する。「映画って、二人で？」

「なによ今更。へたに人誘って気を遣う方があたしは嫌だよ」

「いや、そりや、そうだけど……」 気後れしながらきく。「お前、坪内から、何か誘われなかった？」

「え」 淑音が驚ろく。「何で知ってんの」

「まあ、ちよつと、訳有でな。で、行かないの」

「断わった。坪内君とはけっこう話すけどさ、二人でつて言うんだもん」

「そうか……」

坪内の依頼を断った事を思い出す。四人でというのを、断わった。面倒だと言う理由を即けた。いいじゃん頼むよと喰い付かれた。断わつても、断わつても、頼まれるので、半ば意地になって断わつたら、もういい自分で誘うと怒って行つた。

「まあ、いいけどさ、何て奴」

「吐息をひそめておやすみをつて奴。夫から、もう一寸経つたら朝は日を抱くつてのにも行くからね」

「何だそれ、全然聞いたことない、其んなどこで調べてきたんだよ」

「先生がね」 淑音は窓を見た。「先生が見たんだった」 横顔さえ見えなくなった。

令人の気もちに蔭が出来た。中学二年生、一年も前じゃない、少しずつ、少しずつ、「先生」の話題が増えた。夫と同時に、自分の気もちが裸形になった。運動が出来て、夫を賞められても、女の子に告白されても、只、有頂天でいる事が出来なくなった。令人も窓を見た。令人は窓の、窓に当る雨の、其隙間を見た。淑音がなにを見ているのかは、わからない。令人は立ってカーテンを閉めた。椅子に戻る時、少し赤らんだ淑音の頬が目に着く。

「部活の日を避けてくれたら、いつでもいいよ」 優しい言い方になつていた。「淑音の予定に合わせるからさ」 夫を忌々しくも思った。

「ありがと」 淑音はまだ窓を見ていた。窓のその夜は、もう室から消えた。「淑音ちゃん、晚餐喰べて行くでしょ」 台所から母親

の大声が届く。「はあい、いただきまーす」不自然なくらい、勢いを付けて淑音は答えた。

「そういえば、映画って、お前……」

見る前に言った不安は見事的中した。淑音は「なに」といって思い中ることはないという態度だったが左うだった、淑音はすぐねることを思い出した。

昔しから、映画に行くと、大抵途中でねた。はやりのアニメなどが映画になると、「見たい！」と言い出すのが淑音で、付き合われるのが令人だった。令人は途中で寝たことがなかった。だから淑音の抜けたストーリーを填補させられた。夫でいて「面白かったねえ」と満足するのはいつも淑音だった。

淑音と行ったのは重に小学生の時で、今回行くのは一年振りぐらいだったと覚えているが、淑音の性質は変らなかつた。三十分くらいから仮睡し始め、夫でも耐えた方だが、一時間をすぎた辺りで寝息が聞えた。先生が見たんじゃなかつたのか。寝息をきくと苛烈いた。しかし映画よりも其呼吸に意識を擒られた。

「何で寝ちやうのかなあ」

淑音が嘆息するのを意外に思った。映画館を出た後、食事をしていると、言った。

「きょうは絶対大丈夫って気がしてたのに」

「退屈だったんだろ」スパゲティを巻きながら令人が答える。

「ううん、面白かった、面白かったと思うんだけど……」

「先生は、何て言ってたの」

「あ、先生は、其んなに好みじゃなかつたとか言ってたかな左う
いえば」

淑音は紅茶を飲んでいた。ストローから紅茶を啜って、考える
仕草になる。

「じゃあ、いいかな、左右いうことで」

「どういうことだよ。まああの映画も、中途半端だったよな、主

人公があの子のことすきなのかも判明しないし。なんか、一度、その女の子が寝てるのを見守るシーンがあってさ、何か気の利いたことでも言えればいいのに、口だけ披いてなにもいえないんだ。映画の主人公なんだから、もつと、かつこ好く生きて欲しいんだよな、好きなら好きってバシツと決めて欲しいし」

「言ったんだよ」淑音が身をのり出す。「あの子はね、あのシーンで、きつとなにかを言ったんだよ。だって画面は窓をうつしてた訳だからさ、ほんとになにも言わなかったかわからないじゃない。想像の余地があって、あそこは私すきだったな」

「想像の余地って、赤毛のアンじゃないんだから、第一お前その時寝てなかったっけ」

「起きてたの」思わぬ勢でいう。「ていうか、赤毛のアンって、どういうこと」

「赤毛のアンで、想像の余地って言葉が、よく出て来るんだよ。何で自分でいっといて知らないんだ？ おれは中一の時に読書感想文で読んだから覚えてたけど」

「赤毛のアンか……」淑音は落着いて又紅茶をのんだ。なにを考えているのか分らない。浮ついていて変だなと令人は思った。

天気が曇りで、いつ降り出すかわからなかったので二人は帰った。令人は着替え、バスケットボールをもつと、近所の公園に歩いて行った。歩いて五分の所にバスケットのゴールのある公園がある。公園には既に部長である佐島がいた。

「おう」

声をかけると佐島が答えた。暫らく二人で練習する。パスや、シュートをくり返してから、対戦した。おわると並んで休んだ。

「なあ、令人、朝練来てくれよ」

佐島が不意に言った。

「やっぱ後輩にも示し付かないしさ、令人、レギュラーじゃん。やっぱ率先して練習に来て欲しいんだよね、俺としてはさ」

バスケットボール部は略毎日授業が始まる前に練習をしております、

令人は夫に参加していなかった。

「俺より、まず野比に言えよ。顧問なんだからもつとやる気出せ
つてさ、まあ俺としては休日休める方が嬉しいけど」

「それはそうだけどさ、ほら、それは俺一人でいうより令人とか
も力を合せていった方が効果ある訳じゃん、最後の夏だし、やっぱ
俺は力を出し切っておわりたい訳よ」

「最後の夏か」令人は考えた、「まあ、左右だな、お前がおれの六合
に一滴を点ず、を返してくれたら参加してもいい」

「さーて練習するかあ」佐島は立あがって練習を再開した。佐島
は令人に頭があらがない。令人がもっていた六合に一滴を点ずとい
うCDを、佐島に借したら、二度と返って来なくなった。夫は枚数
が限定されている貴重な品で、令人が夜通し並んで手に入れたもの
だった。扱かいは気を付けるよう嚴重に注意して借したら、牛乳
を零し狼狽し踏み付けた。一時は一カ月全たく口を利かない程怒っ
た。いまも思い出すと蟻まわりを感じるが、瞋りと言う程ではない
ので、怒ってないよと言う。しかし事ある毎に引き出して佐島を苦
しめるのが常だった。

又二人で練習していると、空が晴れて来たが、いい時間になった
ので帰った。令人は最後の夏という事を思った。

一年前、令人は、今よりも熱心に部活に参加していた。憧がれて
いた先輩がいた。灘方先輩といった。男前で、気味で、バスケが抜
群に旨かった。其人に近きたいと、又、力になりたいと思つて、
練習に励んだ。

実際チーム全體も、旨い人が多かった。顧問も過去何年かが一番
いいチームだと、自信を持って言った。県大会が迫っていた。組み合
せはもう極つてあり、二回戦で、去年優勝した学校と中ることが分
つていた。勝てる見込みは少なかった。然し今年の自校なら或はと、
期待させてくれる何か先輩にはあった。先輩も優勝校を倒すぞと
公言した。チームは打倒することを目標に一丸となった。

大会が始まると、令人は茫然とした。一回戦、全たく意識していなかった無名校は、大型の選手を各地から集めて来ていた。大きい丈でなく、うまかった、強かった、令人の学校はまったく歯が立たなかった。令人はベンチで応援することも忘れた。最初は指示を飛ばしていた顧問も、黙って座っているだけになった。殆どの部員が言葉を失なった。灘方先輩は最後まであきらめなかった。其すがたに胸を打たれる一方で、「こりや相手がわるかったな」と独語いた顧問の言葉を、打消すことの出来ない自分を感じていた。

先輩の最後の夏はこうして終わった。「来年はお前らが倒してくれよ」先輩は冗談をまじえてこう言った。令人は先輩に対して、失望した訳でも懂がれが消えた訳でもなかったが、始めて終りのことを考えた。突然くる終りのことを。ことしの自分達が、先輩達に、明かに劣ることも考えない訳に行かなかった。

夏がおわって、最初の方は朝の練習に参加していたが、其内体調が悪く行って行かなくなった。夫でも一二週間休むだけの積だった。ほんの少し距離を離して、元の調子をとり戻そうとした丈だった。朝通常の授業にあわせて登校すると、毎日淑音に会った。

「朝練どうしたの」と訊くので、「部長がかわってな、朝はやんなくなったんだよ」と嘘を吐いた。放惰っているというのは些さか憚かられた。「ふーん、それじゃあさ」淑音は顔を背けて言った。「朝、一所に行ってくれない？」恥しがるとの淑音の癖。

「先生が、この時間ぐらいに、のって来るんだ」

先生の話が増えて、でも少し気になる位のことだろうと思っ
ていて、夫が本気なんだと知ったのは、此時だった。「先生来るんなら、俺いる必要ないじゃん」令人も視線をはずした、「時間、不定期でさ、仕事がある時はもっと早いんだって。先生いるかと思つて、いないと、何かよくない気もちになるんだよね、だから、令人、つき合つてよ」視線をはずすと追つて来た。

「いいよ、わかった」優しい言い方になっていた。「其代り、朝迎えに来いよ」終りのことを考えたのかもしれない。

いつか来る終り、最後の夏、此梅雨も、すぐにおわりがくる。自分が犠牲にしたもの、自分の為になったこと、一つ々々勘定したが、茫漠な夫を把握し得る程明確な頭を令人はもたなかった。

緑色の髪の毛の子が、酔って、ふらふらと歩いている。頭というのは髪の毛のことだ。テレビの画面で少年は煩悶していた。

令人の部屋にはテレビと、ビデオがあつて淑音が借りて来たDVDで映画をみている。まんがが原作の映画で、とてもおもしろかつた。しかし淑音は始つて一時間もせず寝た。

先生のお奨めの映画なのだそうだ。此所、夫を仕入れて来ては、令人の家で見ている。自分の家でみると言うと、寝ちゃったら、筋がわからないじゃないという。令人に見させて、寝ていた部分の辻褄を合せ、感想を其儘引用する事もある様だ。実際、先生に奨められたものは面白いものが多かった。夫も癩に触つた。筋がわかるまで、何度でも見ると言う。面倒なのか、首を豎には振らない。面白ければ寝ないというのでもない様だった。八割の確率で寝るから、残りの二割は起きている訳だが、見終つて首を捻ることもある。最後のあれはどういう事だったの。令人の感動した部分の、解説をすると、うーんと唸つて興趣を解さない。

先生とは趣味があわないんだよ。言おうとしたこともあつた。冗談をまじえて、或はポツリと。しかし其語が頭に湧いて、迷っていると、いつも機をのがした。言われた淑音の反応を考えた。悲しがるだろうか、怫然になるだろうか、試して見る程には、令人に好奇心がわかなかつた。

四人でデートする日が近いていた。四人というのは、令人と、淑音と、令人に手紙を送つて来た奈緒子、夫に以前淑音との仲をとり持てと迫つて来た坪内のことだった。少し前、吐息をひそめておやすみをとという映画を見に行った時、淑音と令人を目撃した生徒がいたらしい。後日坪内がやって来た。

「大町、お前、稲村さんと映画行つたって聞いたけどほんとか」

何も考えずに答えていた。

「ああ、行ったけど」

「どういうことだよ、お前つき合っていないって言ったよな、俺の頼みを断わつといて自分は二人でデートか？ ふざけんなよ」

胸倉を攫まれた。坪内は柔道部なので、いまにも地面に叩き付けられそうに思う。内心危険いなと憚ったが、平静を装おった。

「まあ、おち着けよ、あれは淑音に頼まれてだな、仕方なく、別にお前を欺そうとか出し抜こうとかそんなんじゃない」

「頼み？」真剣な眼光で睨む。「稲村さんに言われたら言う事きくつてののか」

「まあ、そうだな、その時々によるけれども、場合に依っては仕方なくきくことも……」

「じゃあ来週の日曜デートな」突然放恣と笑う、「淑音ちゃんには約束取付けてあるから。久木奈緒子ちゃんて子知ってるか？ 其子には淑音ちゃんから声懸けてもらったから、四人で。いやあ淑音ちゃんからお前の了解取れたらってことでオツケーもらってさあ、やっぱ持つべきものは友達だねえこんなにあっさり了解してくれるなんて。まあ、まさか俺に借りがあるのに断わったりはしないだろうと思つてたけどな？ じゃあ来週の日曜だから忘れない様にねえ忘れても僕は全然構わないけど」

上機嫌で坪内は去って行った。その日の夜に淑音に聞く。

「あー坪内君ね、私の所にも来てさ、どういうことって聞かれるもんだから、困っちゃってねえ、そしたら彼池からじゃあ今度四人で出掛けようかと持ち掛けられたから、つい唯諾しちゃった」

「うん、まあ夫はいいんだけどさ、久木さん？ 奈緒子ちゃん？ てもしかして俺れに手紙くれた子じゃないの、だったら俺れ断わつたのに凄げえ気まずくない」

「ああ、夫ね」目を泳がして答える。「実は、ちゃんと、断わつてないんだよね、なんか言い辛くてさ。手紙渡したよおつて、何か考えさせてくれていってたよおつて、言っちゃった」テヘツと言

う感じで続ける。

様子を見て可怪しいなと思った、「お前、夫だけじゃないだろ、まだ他にも余計なこと言っただろ」

「あー」指先で頬を搔く。「手紙読んで、感動してた見たいだよ、とか何とか……」

「打っ飛ばすぞ」嘆息を吐く。「夫で、四人で行くことに、なつた訳ね」

「左右です」悄然れて淑音が答える。令人は考えた、行くべきか否か、答えがきまっている間に、故意と迷うのは馬鹿らしい、意地悪してやろうか、困らせてやろうか、想像の上での行いは、実際の上には現われない。

雨がふりはじめた。丁度映画がおわった所で、令人は窓を開けて手をのばす。雨は掌で炸けて水になった。淑音は眠っている。淑音は、決して、寝る時令人に倚らない。眠っている淑音に、変な気が起ることは有るが、此距離をつめられない。淑音は床に座って、ベッドに凭れて、眠っている。令人は窓に靠って淑音をみた。目をそらして、すこし考えると、淑音が帰る時に使う傘を、出して置く為に一度室を出た。

寧ろ土砂降りになれば、願った邪念は叶わなかった。六月が終つて最初の日曜日、七月ということを通剰に意識したのか、太陽は炳々乎として天に騰った。雲もなく、気温はあがり、令人はこんな日に歩き回るのかと暗澹した。

初めて真面に会う久木さんは、思っていたより、可愛かった。男女の「可愛い」の合致する事の少さに期待していなかったが、意外の感が萌した。黒い髪を、後ろで一つに束ねた、ポニーテールという髪型をしている。服はズボンが膝より下の、七分丈、上は花柄が淡く点じてあるシャツを着ていた。赤い柀のめがねを掛けて「こんにちは」という。令人は頭を下げて「どうも」と言った。

淑音が花を見たいというので、寺を回ることになった。此町には

古刹こさつが多く、花で有名な寺がいくつもある。令人れいとは花に詳しくないのでアジサイぐらいしか名前がわからなかった。紫の花の、一つ一つが開いて、一団なを成しているのを美しいと思う。その一団が、簇むらがり合あって、一體いつたいをなしているのを美しく思う。しかし六月も終おほると、枯れ始はじめている花も多く、その様さまを見窄みすぼらしいとも令人れいとは思った。

坪内もとは固おおより大張おほり切りきりの體ていだった。淑音しとねと坪内もと、久木さんと令人れいとで二人ふりずつ歩くが、坪内の騒さわぐ声こゑが能よく聞きえる。令人れいとは話わすのがあまり得意とくいでないので黙もくることも多おほかった。しかし久木さんは根ね気きよく話わし懸かけた。

「大町くんは花はなって好き？」

「嫌いじゃ、ないよ。でもそこ迄までの興きょう味みもないかな、第一男だいいちおとこがお花はな好きすつてのもちよつと気きもち悪わるくない？」

「ううん、そんな事ことないよ、すてきだと思おもう。私わたし、この町まちって、すごく好きすなんだ。一つ々ひとつひとつの季節きせつに、色いろんな花はなが咲さくこと知しれるし、お寺てらも町並まちなみもすごくすてきじゃない？ この町まちで育そだてて嬉うれしい」

「久木さんは、じゃあこの町まちで暮くらしていきたいと思おもってる」

「うん、大学だいがくもあるし、就職しゅうしょくするののもここがいいな、大町くんは左ひだりうみは思おもわない？」

「おれは、全然ぜんぜん、わかんないな、考かんえたことこともない。高校こうこうも漠然もくぜんとしか考かんえてないし、其その先まなんてもつとね」

坂さかや、階段かたいを歩あくので、汗あせを濡ぬいた。前まへで坪内もとが叫こゑぶ、「遅おそいぞお、お二人ふりさーん」淑音しとねがとなりで笑わらっている、二人ふりはどんな話わしを仕しているだろう、

「淑音しとね、楽したのそうだね」久木くきさんがいう、「坪内もと君くんって、面白おもしろいんだよ、いつも巫山ふざけたことこといって、クラスじゃ人ひと気きあるんだ、ていっても、大町おほまち君くんほどじゃないけど」

「いまは面白い男おとこが旬しゅんだらな、うらやましいよ、おれは、正直まことになにかをいいうことこともでききないから」

「それは……」なにか言いおうと口くちを披ひらいたが、続つかなかつた。

昼からあつまつたので、ご飯を喰べる必要はなかったが、少し休もうという事になり駅前を通りから選んで一つの店に入った。女の子と、坪内があんみつを頼み、令人は水を飲んだ。

「大町くん、甘い嫌いなの」久木さんが訊く。

「嫌いっていう程じゃないけど、好んではたべないかな、格別おいしいとも思わないし」

「甘い物のおいしさを知らないなんて不幸ねえ」坪内が姿を作つて答える、「夫とも何だ、お金がないのか、いいんだよあんみつ位お兄さんが奢って上げるから」

「水がすきなんだよ、放つとけ、でも甘いもの好きな男って多いよね、うちの兄貴が男が軟弱になったからだ、前はもつと甘いものが嫌いな硬派な男が多かった、て憤どおつてたよ」

「あれ、でも、人士さん甘いもの好きじゃなかったっけ」

「そう、それも、生クリームの載ったプリン喰べながら言うんだからばかだよな」

令人と淑音で少し笑ったが、失敗ったと思った。兄の話しをしても二人には伝わらない。淑音も感じた様で話しを変えた。

「じゃあ、是から、どうする。私は水族館に行きたいけど、なにか希望あれば」

「そう言われちゃあ水族館しかないでしょお」坪内がすぐに賛同する。「やったあ俺水族館すげえ好きなんだよね、もう三年ぶり位だけど。あの魚が泳いでる感じ、たまらないよね、スイスイっていうかスイーっていうかね」

漠然とした印象しかのこってねえじゃねえか、思ったが口には出さなかった。淑音は久木さんにもきこうとしたが坪内が余り燥然ぐので水族館にきまった。何だかやりづらいなと思った。淑音は、ただ、なにも案が出ないと困るしほかの人が案を出しやすい様にと思つて水族館といった丈だ。無論行きたかった事もたしかだろうがあ騒がれては引つ込みが付かない。夫にと思つた。令人は久木さんが口を抜くのを見た。坪内が喋舌つていうのを磨めたのだろうか希

望があるなら言えればいいのにと思った。平生とちがうということ、考えた。

「まさか水族館とはなあ」女の子がトイレに行っている間、先に店を出た所で坪内はいった。「完全に盲点だったよ。やつぱり淑音ちゃんが発想からして違うね、発想さえもかわいいもん、ああ今日という日が永遠につづけばいいのに！」

興奮する坪内を横目で見た。まさか、こいつに、気もちが動くこともないだろうと思う。どうなんだろう。こいつならこんな調子で、「かわいいよ」とか「きれいだよ」とか、其んな、自分ならためらう様な台詞を、吐くことができるのだろうか。

又歩き出すと、自然二人ずつの組ができた。淑音と坪内、久木さんと令人、坪内は、どうしてもああ捷速く自分の望む座を占めることができるのだらうと思う。久木さんにしたって、望む地位を手にいれている訳で、其所には自分の知らない技術が伏在するの、運を天に任せて偶然に依った結果なのか、令人は疑がった。

久木さんを見ると「なに」と赧れた様子でいう。

「いや、其めがね」令人はいう。「西浜って先生のに、似てるなと思つて」

「やだ、淑音みたいなこと言わないで、淑音なんて、どこに売ってるのなんて執固くきいて来るんだよ、自分は目好いのに。もし同じめがねを掛けたって、距離が近付く訳じゃないのにね。距離は、近付かないと、近付けないんだよね、最近わかった。幻想は、距離をうめてくれないから、ちゃんと行動しなきゃいけない、淑音が、行動してないとは言わないけどさ。でも淑音の場合行動すればする程距離が裸形になつていつて、其んなの凄らいじゃない、苦しいじゃない、もつと、しあわせになれる方法がさ、あるんじゃないかな」久木さんは令人を見上げた。「淑音の場合すぐ近くに」

令人はすぐには答えなかった。距離のことを考えた。観覧する人々が、泳ぐ魚を見て、いつか離れていく。明るい水槽と、暗い廊下、続いていく広い部屋。令人は少し経つて「そうかも知れないね」と

だけ答えた。

西浜のことを考えた。ひよろひよると細く、背だけむやみに高く、頼れない印象が気に入らない。西浜は令人のクラスの数学を受け持っている。淑音にずるいと言われ知るかと思う。西浜は平生めがねを掛けていないのに、授業の時だけ掛ける。気にも留めていなかったが、淑音から、あれはいつも掛けてると目が疲れるからなんだって、キリツとして、さあ授業始めるぞって感じして、かつこいいよね。と言われて気どりがつてと思う様になった。西浜は数学で、基本的な計算をよく間違える、足し算とか、掛算とか、そんなものを。淑音は他の数学の先生からあれは西浜先生にとって、中学レベルの問題が簡単すぎるせいだ、という情報を仕入れて来て頭がよすぎるんだねと誇らしげに弁護した。そんな訳があるかと令人は思う。西浜が間違えて、生徒が指摘すると、西浜はごめんごめんと詫言って訂正する。令人は苛烈く。

どこがすきなのかと思うことがあった。問い尋したことはなかった。どこまですきなのかと思うことがあった。問い尋したことはなかった。

水族館を見て、日の暮れるころ、砂浜を歩きたいと翼々ながら久木さんが提案した。赫々な太陽は、海や、砂浜、山を燃やした。空は炎に焙られた。三五に簇がり嘆賞する人々が、風情を殺す。自分も其一人なのかと令人は疑がった。然し断じる勇氣はもたなかった。

前を歩く二人が、ふざけて、砂浜を馳けて行く。令人は夫を見送った。久木さんはいった。

「私ね、ずっと、夢だったの。ここの砂浜を、好きな人と二人で歩くこと」

令人は立ち留った。

「もし、よければ、手紙の返事きかせて欲しいな。淑音が、大町くんが感動してたって教えてくれて、夫は、私に気を遣ってくれたからだってわかってはいるんだけど、でも、嬉しかった。私は夫丈

でもいいの。だから、正直な気もち、教えて下さい」

最低な女だなど思っただけの前の淑音を盗みみた。一時の同情のために誤解を与えた。夫でも、嬉しかったのなら、好かったんだらうか。令人は答えた。

「ごめん、おれは、……」

「淑音のことがすき？」潤んだ目で首をかしげた。

「そうじゃない、あいつとは、別にそんなんじゃない。ただ、中一の時に、おれ一人の女の子とつき合ってた、全然うまくいかなかったんだ。だから、暫らくは、左右いうのはいいかなって、夫丈のことなんだ、ごめん」

「そっか……」久木さんは顔をそらして海を見た。涙をぬぐった様にも見えたが、令人も顔をそらした。手紙はたしかに読んだ。しかし感動する程のことはなにもなかった。すきといわれて嬉しかった。しかし夫は夫以上のものではなかった。

波は寄せて返した。前の二人は、いつか歩いて此方へ向っていた。「じゃあ、また、こういう風に遊ぼうね」元氣を見せて久木さんは笑った。令人はかすかに頷いた。又距離のことを考えて、掛け様とした言葉をのどに仕舞った。

中学一年生の一年間、淑音は引越していていなかった。其生活になれた頃、淑音は帰って来て、其大人っぽくなったのに驚いた。しかも自分のことをだれよりも懐かしがってくれて、其態度にかわりがなかったのが（令人が余りかわっていなかったせいかもしれないが）嬉しかった。

令人が贈った、陶器でできた、小さなイルカのキーホルダー、いま考えれば幼稚なものを献げたものだと思うが、夫を淑音は宝物とってくれた。引越してから一年間、大事にもっていてくれた。先生とのつながり、理科室の鍵とも、一所にして持っていてくれた。だから宝物でありつづけるんだと思っていた。

四人で遊んだ帰り、令人と淑音だけが同じ駅なので、並んで帰っ

た。令人がいった。

「久木さんから返事欲しいっていわれたから、ことわったよ」

淑音が令人を見る。「そっか。私も、坪内君にね、告白された訳じゃないんだけど、つぎは二人で遊ぼうっていわれたから、ことわった。こういう風にみんなでないけど、二人では遊べませんって。ちゃんと断わるのって大事なんだね、坪内君、まじめな顔して、わかった、ありがとうって言ってた」

「お前、そう言うんなら」久木さんのことを思った。「二度と手紙とか貰ってくんなよ。あと適当に返事返すなよ。久木さんがおれが感動してたって聞いて嬉しかったって言ってたぞ、きょうだってもしかしたら期待して来てたんじゃないのか、ああいうのはもう絶対にやめろよ」

「なに、私が悪いの」淑音が怩然になった。「そもそも令人が直接奈緒子ちゃんに答えて上げればよかったんじゃん、なに、私がわるいみたいにいっちゃって。令人には二度とあんない子は寄って来ないよ、一生一人で後悔しろ！」

淑音の言い様にカチンと来た。二人は黙って帰った。駅からは淑音の家の方が近いので「じゃあな」と門に對う淑音に声をかける。反応はなかった。又カチンと来たがどうせあしたには元に戻っている。言いきかせて二件となりの自家に向った。

「令人！」ポケットに入れた鍵が奥にいつて仕舞い、出すのに手間取っているとうしろから声が追ってきた。振り返ると蒼ざめた顔の淑音がいる。胸に獅がみついて来た。

「鍵が、鍵がないの」焦った様子でいう。「理科室の鍵」

「もってたのか」訊くと頷突く。「何で学校でもないのに鍵を」不注意にいらつく。

「だって、宝物だから……」声が途絶えた。掛ける言葉を見失なう。「どこまでももってた」現状をたしかめる。「最後に見た記憶があるのは、どこだ」イルカのキーホルダーを、思い浮べる。

淑音は考える、「駅まで、駅まで持ってた。改札を通る時みた。

多分、駅からうちまでの、間に……」言うので探した。まず淑音の家の門周辺を探し、駅へ緩くり戻って行った。もう夜になっていたので、携帯電話のライトで道を照らした。大した助けにはならなかった。淑音は「どうしようどうしよう」とくり返した。耳障りに感じた。淑音が令人のシャツの、端を掴む。ほんの少しの動きづらさが、鬱遠しさをつのらせる。

平生歩く時の倍の時間を懸けて、駅に辿り着いた。なかったが、此所だろうと、鑑定をつけていた。改札を通る時に、落したんだろう。しかしもしなかったらと思つた。又戻って、見つけられるのか、駅で見たというのが、もし淑音の記憶ちがいだつたら。他念を払おうと、床を凝視して歩いた。

駅員に落し物がないか聞いて来いというまで、淑音は冥裡と突っ立っていた。通行人にはよくない目でみられた。駅に鍵は届いていないという。令人は焦っていた。どうして俺れがと思つた。其時、床の隅の方に、なにかあるのに気づいた。

「あ」あげた声に、発見の喜びはなかった。淑音はすぐに飛んで来る。落した鍵は、蹴られ、踏み付けられたのだろう、イルカのキーホルダーは無残に摧けていた。自分の思い出の象徴。淑音はすばやい動作で鍵を拾うと、令人の胸に額をおし付けた。

「ありがとう」淑音はいった。「よかつた、よかつた……」其手は組み合せられて、中には鍵が収まっている。

価値は変ることを知つた。重さは変ることを知つた。淑音の宝物のそばで、自分の贈り物は、宝物でなくなっていた。淑音の「よかつた」には、明かな安堵が込められていた。令人は淑音の肩に手を置いて、よかつたなというと、引き離したくても離せない、引力を、疎しく感じた。

激しい夕立が降つた。令人は体育館で其音をきいた。淑音の雨だなど思つた。しかし糸かな時間で雨はやんだ。

淑音と、令人の家の裏の方、海と反対の側には小さな山がある。

公園があるので、小さい頃は能く二人で遊んだ。いまでもバスケットボールの練習に行く。

公園の端の方には、ベンチがあつて、海と、町、家々が広く見渡せた。波の音もかすかに聞える。淑音はなにか有るとよくここへ来た。いまもいるだろう。令人は家に帰ると私服に着換えた。夜は迫つて、日は追い出されている。

淑音がすきな、西浜という教師、彼が結婚したという。話し好きな女子が、大学生の時からつき合っていた彼女らしいと、情報を手にいれて流した。どの時点で淑音がしつたかは分らない。だか耳には這入っているだろうと、令人は考えた。

こどもの時は息を切らして登った坂を、ゆつくりと歩いた。昔しは、大人になれば、息を切らさず駆け登れるだろうと、夢に見た。しかし此年になって覚えたことは、自分のペースで歩くと言う丈夫なことだ。体力は比べものにならない程即いた。だが息を切らさずに登り切ることにはむりだろう。

淑音はないているだろうかと思つた。泣いていたら、どんな言葉を懸ければいいだろう。泣くなよ、元気出させて、思い付く言葉はどれも幼稚だった。是も、大人になれば、身に着いているだろうときめ込んでいた。ドラマや小説にある様に、気の利いた台詞を吐く。左ういう様に自動的になっているのでと、自然に、思っていた。育つ自分のまわりには、そういうすてきなもの許りがあつたから。もう十五年も生きたのになと令人は思う。十五年経つても、まだこどもの儘だ。色々なことが、わからない。でもわかることも増えて来て、きつと、もう少し経てば色々なことがわかつていくのだろう。でも、いまは、わからない。いまずぐに、分る様になればと、令人は思つた。

思つた通り、淑音は居た。ベンチに座つて、隠れた太陽を、残して行つたわずかな赤を、眺めている。空と海。令人は淑音に言った。

「座ると濡れるぞ」

淑音は制服の儘でいた。白雨の後なので、木でできたベンチは

湿っている。淑音はちらりとベンチを見た。

「どうせもうすぐ夏休みだし」

淑音は平静だった。元気はなかったが、おちついて、取り乱した様子はなかった。注意したが令人も座った。淑音は海が見える側に座って、テーブルに頬杖をついている。令人は対いに座を占めた。但淑音に背を向けて、テーブルに肘をのせて、海を見た。

須臾夜になった。雨あがりの空は澄んで、晴れ渡り、家々の灯がよく見えた。これをきれいだと形容する人もいる。一つ々々の家の明りが、人が生きている証なのだ。令人は左右思わない。自分に関係のない人間が、あれ丈の数存在するとは、どうしても想像できない。しかし其観念は、別に、どこへの拡がりももたなかった。

淑音が喋舌った。

「先生が結婚するって、聞いた？」

「ああ」

「ねえ、あれって、勝手じゃない。私、あんなだけ好きってこと、前面に出して話してたんだからさ、私に丈は、せめて、直接教えてくれてもよかったんじゃないかって、思うんだ。諦めさせる為とか、左んな理由でも、よかった。でも私が聞いたの、真理ちゃんからだよ、信じられる？ あの子が散々噂で流した後。私先生に訊きに行ったよ、結婚したってほんとですかって、先生、うん、左んなんだって、照れた、恥しそうな顔して、言ってた。しあわせそうな顔。私怒りたくて、其様なよくない感情だってわかってたけど、でも、私がすきなわかって欲しくて、思い知らせたくて、行ったのに、どうしたらいいかわかんないじゃない。私怒って、これお返ししますって、部活もやめますって、鍵、返して来ちゃった、ごめんね、令人が折角探してくれたのに、私、あの時、なくしたらどうしようって、もう、鍵、任せてはもらえないんだろうって、そして先生と話す時間がなくなるって、怖くて、だから、令人がみつけてくれた時すごい嬉しかった。嬉しくて、よかったって思っ、なのに、鍵、返しちゃった。ごめんね、令人に、私、なにも返せない、

迷惑かけたのに、もう、なにものこってない、先生のこと好きだったのに、もう、全部きえちゃった、私のもの、全部、のこらなかつた」

泣き出した淑音しとねに慌あわてた、「いいんだ」やさしい言葉を探す「お前のこと好きだから」

淑音しとねの涙が一瞬やんだ。「私のこと……」聞き返すように独語つぶやく。

「令人れいとが」

「そう、だから、いいんだ」言葉を選ぶことができない。どうすればいいかも、わからない。上擦うわすった気もちと、どうにかしたい気もち、泣くなよと思う。元気出せよ……

「ごめんね、ごめんね、ごめんね」淑音しとねが一層いつそうはげしく泣いた。夫それをみて、落ち着きが少し戻る。仕方ない。令人れいとの身からだはいま淑音しとねの方かたに向むいていて、頬杖ほおづえをつくくと、町と海を顧かえり見みた。夜の海は、光を呑み込んで、見えない。波の音だけ届く。空は霽はれて、点々と浮うかぶ星が、雨の遠きを感じさせる。